



Title	ワークショップ「異言語環境で日本の小説を読む」—葉山嘉樹『セメント樽の中の手紙』—趣旨説明
Author(s)	合山, 林太郎
Citation	多言語翻訳 : 葉山嘉樹『セメント樽の中の手紙』. 2013, p. 57-57
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/61311
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

2015年2月13日

ワークショップ「異言語環境で日本の小説を読む」

—葉山嘉樹『セメント樽の中の手紙』—

趣旨説明

合山 林太郎

1 プロジェクトの沿革

本プロジェクトは、日本文学・国語学研究室を中心に比較文学研究室などの大学院生(PD、研究生なども含む)らがチームを組み、一つの小説を同時に読み進め、翻訳するというものである。大阪大学大学院文学研究科日本文学・国語学研究室には、多くの国から来た留学生が集まっているので、このような企画が可能になる。

前回第1回の本プロジェクトは、2012年に行い、太宰治『黄金風景』を9言語に翻訳した。今回は、文学研究科比較文学研究室や言語文化研究科の学生、さらにハイデルベルク大学からの留学生も参加し、葉山嘉樹『セメント樽の中の手紙』を11の言語に翻訳した。

2 プロジェクトの体制

全体で2回程度のミーティングを行い、ディスカッションなどを行う。参加者には、「分からることは何でも質問しなければならない」というルールを作り、どのような細かなことでも質問してもらう。日本人側が、可能なかぎり調査し、その疑問を解消する。

完成した原稿は、前回プロジェクト担当者や、留学生の母国の大学における指導教員に査読を依頼する。また、複数言語を話すことができる者同士で、互いの翻訳をチェックし、解釈が異なっている箇所などを指摘しあう。

3 ワークショップの目的

翻訳の実践において、何が問題となり、それをどのように解決したかについて情報を共有する。また、異なる言語の知識や文化的背景を持つ人々にとって、日本の小説(『セメント樽の中の手紙』)を理解する上で何が障害となるのか、あるいは、どのような点がとくに注目されるのかなどについて議論し、今後の国際化社会における日本文学の理解・受容のあり方について考える。

4 ワークショップの発表内容について

翻訳作業者に、各自自由に意見を述べもらうが、本ワークショップで聞きたいこととして、事前に以下のような事項を質問した。

- ① 翻訳する際に難しかった点(言葉、感情、文化、タブー、どのレベルでも結構です)。
- ② 先行の翻訳と、自分の翻訳との違いを述べてください(工夫した点、留意した点など)。
- ③ 自分の国に、『セメント樽の中の手紙』と似た小説はありますか?
- ④ 翻訳対象言語において、この作品は問題なく受け入れられるでしょうか、それとも難しい部分を含んでいるでしょうか?
- ⑤ 日本ではこの作品は高校生の教科書に掲載されています。そのことをどう思いますか?